

着色山水

1 あの水を

あの水を君といつしよに飲む約束をしたので
その前に 一度僕はそこに行ってみることにした
小鳥が鳴いてゐて 斜めの急な道も疲れない
石も 木の根も つまづくやうなこともなささうだ
深い所にあるつめたい湧き水だから
自然に 道はぬかるみに近い有様の所もすぎるのだ
君の顔をこちらに向けてみたり 君を背中から抱いてみたり
僕は もう 帰り道の時のやうに考へた
まだ これから 大きい石が肩や顔に迫る場所も
例の伝説の足跡の場所もすぎないのに
泉の目に君の手を入れ 僕の手を入れ
握りしめたあとのやうに考へた
しかし 僕の腕時計が 不意に ブザーのやうな音をたてはじめた
君と水をのむことが 火を盗むことのやうに
大変なことなのだな と考へながら
僕は 音をとめ 歩みを早めた

2 木のあひだを

木のあひだを雲が飛んでゐることもあるし
雲のすきまから梢がのぞくこともある
ふりかへつて見た時に そのことを早く言葉に移さなければと思ふ
だから 神殿の出来事も同じだ
お守札を扱ふ巫女が姿勢を崩して立ちあがり
目を見はつて叫び声をあげた
僕は それは 鼠がそこを走り去つたのだと思つた
僕が巫女の前の白木の台の所に行くと
白い片方のたもとの先が焼けて まだ 赤い糸が
いろいろの方向に散つてゐた
消えた跡はうす墨色に残つた
叱られてしまふわ と言つて巫女は悲しさにこちらを見た
大丈夫だよ 叱られないよ と僕が言ふと
短大を出たばかりのやうな彼女は たもとをあげて僕に見せた
小さい火の糸が辿つた跡は
白いたもとを何段階かの黒に変へてゐた
江のほとり あるいは崖の下 釣する人を乗せ

ゆつたりと とどまる舟

静かな風景が もし あのたもとを平面に置いたならば

描かれてゐるにちがひないと 僕には思へたのだ

山では木と雲がいつしよになつてゐる

山をおりる僕をつめたい霧がつつみはじめた